

## 図書 紹介

### 背信の科学者たち

— 論文の捏造はなぜ繰り返されるのか? —

著者：ウィリアム・ブロード／ニコラス・ウェイド(科学ジャーナリスト)

訳者：牧野賢治(科学ジャーナリスト)

発行：(株)講談社／〒112-8001 東京都文京区音羽 2-12-21／TEL03-5395-3521／

A5判／353頁／価格 1,600円(税別)／2014年6月19日発行

本書は、米国において多発した論文不正事件を背景として1982年に発行され、1988年にその翻訳の初版が化学同人社から出版された。日本でもいくつかの科学不正事件が発生したことから2006年に講談社から再出版され、絶版となっていたものが昨今のSTAP騒動で科学者の論文捏造が話題となり、本年6月単行本として再刊されたものである。本書には捏造をはじめとする科学者の欺瞞等が第1～11章と訳者解説にわたり満載されている。

第1章 ひび割れた理想

第2章 歴史の中の虚偽

第3章 立身出世主義者の出現

第4章 追試の限界

第5章 エリート之力

第6章 自己欺瞞と盲信

第7章 論理の神話

第8章 師と弟子

第9章 圧力による後退

第10章 役に立たない客観性

第11章 欺瞞と科学の構造

訳者解説 『背信の科学者たち(原書)刊行後のミスコンダクト事情』

次に各章のサブタイトルを見ていくと、第1章は、証人喚問、ハーバード大学事件、伝統的科学観についてである。第2章は、理論から導き出されたデータ、ガリレオの思考実験、ニュートンの偽り、クッキングとトリミング、ルール違反に対する非難メンデルへの告発、偽りによる成功の報酬についてである。第3章は、中東の天才、盗用の発覚、本格的盗用の開始、苦境に立ったアルサブティ、論文の氾濫、隠れた盗用者たちについてである。第4章

は、欺瞞を防ぐ3つの安全網、生化学者を魅了したキナーゼ・カスケード説、でっち上げの発覚、仲間による追試、再現のむずかしさ、欺瞞の頻度についてである。第5章は、マーティンの普遍主義、上司を疑った研究助手、奇怪な事実、審査の免除、偶然の要素、昇進の代償についてである。第6章は、実験者の予期、動物を使った研究、集団的な自己欺瞞、嘘つき石、ビルトダウン人事件、えせ研究者についてである。第7章は、伝統的な科学観という”様式”、トーマス・クーンが示すもの、新しい考え方への抵抗、科学がもつ非合理的な要素についてである。第8章は、パルサーの発見、搾取の構造、スローン・ケタリング事件、組織の防衛についてである。第9章は、サンバガエルの謎、ルイセンコの勝利と敗退についてである。第10章は、社会的偏見の反映、レトリックの道具と化した科学的方法である。第11章は、真理の探究と名誉、見えざるブーツ、硬直した科学観の放棄についてである。

訳者解説には、世界の状況、アメリカにおけるミスコンダクトの展開、日本における対策、原書刊行後の印象的な事件(世界)、原書刊行後の印象的な事件(日本)、ミスコンダクトはなぜ起こるのか、ミスコンダクトの発生率、典型的な状況の推測が追加記述されている。

巻末には、原書記載の参考資料として科学における欺瞞の34事例についてそれぞれの件名、年代、内容、文献及びミスコンダクト関係の一般向けの主な参考文献18とウェブサイト6と索引が掲載されている。

歴史は繰り返す。捏造も繰り返す。科学者による不正行為が後を絶たない。なぜ、彼らは自らの名誉と職を失いかねないリスクを冒してまでも不正行為に手を染めるのか？このような科学不正な事例の原因を解明して新しい科学のモデルを追求することが目的である。

本年7月3日に「ネイチャーが論文撤回、STAP細胞根拠を失う」、「修正不可能 厳しい判断」との記事や小保方氏参加の監視下検証実験が開始されたとの報道が一斉に載った。理化学研究所のSTAP細胞事件では、論文の捏造や剽窃、共著者や組織の責任について様々な指摘や議論がなされているが、本書を読むと昔からこのような事件が繰り返されていることがよくわかる。

ほかに関係書籍として「科学のミスコンダクトー科学者コミュニティの自律をめざしてー」((財)日本学術協力財団 2006/9 編集・発行)や「論文捏造」(村松 秀著 2006/9 中公新書ラクレ)などがあり、興味ある会員諸氏は併せて参考にされたい(学会事務局)。